

野村卓生(著)

糖尿病治療における理学療法 戦略と実践

評者 市橋則明

(京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻)



糖尿病の理学療法と聞くと、私が理学療法士になった1年目に、ドクターから糖尿病の運動療法をできないかと言われ、困ったことを思い出す。当時は一人職場で相談する先輩もおらず、糖尿病に関する理学療法の書籍もなく、摂取カロリーと運動によるカロリーを計算し、運動量を決めることぐらいしかできなかった記憶がある。当時から糖尿病の運動療法の必要性は言われていたが、まだ糖尿病に対する理学療法士の関心は低かった。

30年後の現在、日本糖尿病理学療法学会の登録人数(2015年4月1日現在)は3,015人であり、多くの運動器疾患にかかわる日本運動器理学療法学会が6,410人であることを考えると非常に多くの理学療法士が糖尿病の理学療法に関心を持っていることがわかる。理学療法士が担当する患者のなかには合併症として糖尿病を有する者が非常に多い。また、近年糖尿病教室なども盛んに行われるようになっており、チーム医療のなかで理学療法士の参加は必要となっている。一方で、糖尿病の理学療法の教育に関しては、内部疾患の一つとしてリスク管理などの観点で学ぶ機会はあるものの、教科書の一つの章にまとめられていることがほとんどである。

本書は理学療法士の視点で、糖尿病に関する総論、運動療法、患者教育、糖尿病慢性合併症、事例紹介が各章にわかりやすくまとめられている。

総論では糖尿病の疫学についてまとめられ、理学療

法とのかかわりやその歴史についても紹介されている。また、「糖尿病は運動器疾患である」という、意外な見出しが目につく。これは、糖尿病特有の合併症が身体機能・能力に及ぼす影響に対しては、理学療法士の持つ運動学や運動生理・生化学の知識や理学療法技術をもって介入することが必要であるという筆者の思いを示しているようだ。II章では運動療法の基本について日米のガイドラインと国際糖尿病連合の指針を踏まえて紹介している。また、薬物療法についても治療薬ごとの注意点や特徴などがまとめられており、知識として不可欠である。III章の患者教育の項では、長期的な運動療法の継続のために不可欠な行動変容のための介入の方法について、患者とのコミュニケーション事例を示して提案している。IV章では、糖尿病の合併症である糖尿病網膜症・腎症・神経障害や糖尿病足病変に関して理学療法士とのかかわりを踏まえて説明されている。

臨床の理学療法士に役立つ本を書ける先生を紹介してほしいと文光堂の編集者に頼まれ、野村先生を紹介したのだが、本書はそのことが間違いではなかったことを証明している良書である。

● B5判, 194頁, 2色刷
定価 4,320円(本体 4,000円)
文光堂刊, 2015年